

「ちよ、待てや、奥村！」

勝呂童子が、前方を飛び跳ねていくように進んでいく奥村燐に怒鳴る。

「なんだよ、もうギブか？」

燐はちらりと勝呂を振り返って、からかうように笑う。確かに燐の体力や腕力は底が知れない。ロクに鍛えてもいない。そんな若い年の男に挑発されて黙っていられるほど、勝呂も大人ではない。普段ならばバカにするな、と言いつ返すところだが、今はいくら何でも無理だった。ぜいぜいと肩で息をする。

「三往復目で、仕方あれへんやろ。ちよお休憩や」

手に持ったポリタンクの中で、トリプルC濃度の聖水が重たげな音を立てた。

祓魔任務の助手に駆り出された勝呂と燐は、隣の県の某市にあるハイキングコースに来ている。日本史に名前が登場することもある古い町で、三方を山に、そして一方を海

に囲まれて、飽きるほどの山や木々に埋もれるようにそこから中に神社仏閣がある。

くだんのハイキングコースは、市の中心部の北東部分を冠のように覆う山中を縦走する。

下生えの草と天を覆う木々に囲まれて、踏みしめられた土と所々に覗く岩の道が続く。急な傾斜の所々に突き出した足場を踏みしめて、飛び上がるように駆け上がる。燐の背中へ、かなり先の高所を、荷物重さなど感じていないようにひよいひよいと駆けていく。勝呂が手から滑り落ちそうになるポリタンクを握り直した。

ウチの山金剛深山に似るところもあるな。

勝呂の実家、明陀宗総本山のあった山からしたら、ほんの小さな峰程度の山だ。しかし所々両手両足で足場を探りながら登らねばならない、かなりアップダウンの激しい箇所もある。『ハイキング』になだらかな行程の野山を歩くようなイメージを抱いていると期待を裏切られることになる。

『これのどこがハイキングコースなのよ！』と、入り口にあった、鎖が手がかりとして打ち付けられた巨岩の連なりを目にした神木出雲の文句に、その場に居たほぼ全員が深

く領いたが、この市としては『ハイキングコースですけれども何か?』と言うことらしい。

勝呂にしても、ここよりも険しい山道を走り回って遊んでいたとは言え、こんなに重い荷物を持って何回も往復させられたことはない。

そんな市からの依頼は、ハイキングコースの中腹から北側の麓に広がる住宅街に、魍魎コルダラが大量に出現するのを祓ってくれと言うことだった。規模の割には難易度の低い任務に任命されたのは下級クラスの祓魔師ハクマシと候補生ホトシナたちがほとんどで、上一級祓魔師の霧隠シュラが隊長、副隊長を湯ノ川が務めている。

悪魔を退ける道具として聖水が大量に用意された。これを噴霧器に詰めて一帯に散布する。拠点を作るテント、食料や寝袋。その他大部分の資材は、山頂、ちょうどハイキングコースの真ん中にある茶店チャンポテンへ通じる細い道路から、既に車で搬入されている。

「俺らもそこら行けばいいんじゃないの?」

当然ながら湧いた候補生たちの疑問に

「地形を少しは把握したい方が良いだろ?それにこう言う道に行くのも訓練の一環だから」

湯ノ川が宥めたが、承服できない塾生たちがぶつくと文句を漏らした。燐だけはその脇で目を輝かせていたが。

『お前らを引率する、中年の俺の身にもなってくれよな』と湯ノ川が、ずっしりとした荷物を背負ってばやきながら歩き出したのを皮切りに、麓にある寺の境内からそれぞれ荷物を抱えて行軍が始まった。候補生達が山頂にたどり着いた時には誰一人としてともに口をきくことが出来なかった。しかし、それだけでは手持ちで持ち込む予定だった全ての資材を運ぶことが出来ずに、男性陣が更に一往復したが、それでもまだポリタンクをいくつか残して、ギブアップしてしまった。

じゃあ、俺が運んでやるよ、と頼もしく言い出したのが燐だ。意地ではないが、それでも一人に任せてしまうのも忍びなくて手伝いを申し出たのを、勝呂は軽く後悔している。もう太股がかなり痛い。明日は大変かもしれない。

「おい、大丈夫か?」

「大丈夫や」

ハイキングコースを反対側から登ってきたのだろうか、壮年の夫婦と思われる、装備のしっかりした二人連れが挨拶をしながらも、大荷物を持って道の脇で息を整える勝呂

を訝しげな目つきで見ながら通り過ぎていく。

「大丈夫や、まだ資材残つとるやろ、さつさと行くで」

「無理すんなよ」

燐が慌てて次の言葉を継ぐ。

「別にバカにしてるとかじゃねーぞ！力余ってるヤツがいんだから、ちつとは使えつての。それだけだ」

「わーつとる」

燐の言いたいことは判る。変に人並みに扱われるよりは、

自分の力を頼つてほしい。少しでも役に立つ方が、燐としても嬉しいのだ。燐は勝呂を氣遣うように少しペースを落として、後ろを確かめながら歩き始める。

「ここ、最初が結構キツイけど、良いとこだよな」

燐が両肩にポリタンクを一つずつ担いで登りながら笑う。ちょうど頂上に当たる辺りからは、山に囲まれた町とその先の海が一望できる。その景色を大いに気に入っていたようだ。

「町中じゃすれ違つても挨拶しねーのに、こーいうところで挨拶すんのもおもしろいな」

大荷物を抱えながらも平気な顔をしている燐に、すれ違う人たちが少し驚いた顔をしながらも、挨拶をされるのが

嬉しいらしい。燐もまるで幼稚園児か小学生のように、元氣良く挨拶を返していた。

山道で挨拶する人は常識や。そう思ったが口には出さなかつた。

「お前んとこの山にもちよつと似てるかな。京都の山も良いとこだけど、近くにこんなところがあったなんて知らなかつたぜ」

「また来たらええやろ」

「おー。みんなで来てーな。弁当でも持つてさ」

「来るんなら、試験終わつてからやな」

「マジか！絶対だぞ！」

ノリ気の勝呂に本当に嬉しそうに笑う。

今来ているのもみんななのだが、まあ今は任務の最中だ。遊びに来たいと言う気持ちは分らないでもない。

勝呂自身、歴史のある町は好きだ。折角ならいろいろ散策してみたいと言う気持ちがある。

付き合つてやらんでもない、と言おうとしたところで、がさりと脇の茂みが動いた。鳥類と小動物以外は生息しない地域では、不自然なほど大きく低木が揺れる。地元の人間しか知らないわき道と言う場所でもない。勝呂が瞬時に